

でんぐん しんがり

殿軍または殿ともいう。

古来から、あらゆる戦闘局面の中で、最も労多くして報われることの少ない退却戦の主力部隊のことだ。

人生七十年古来稀（こらいまれ）

日本の道路舗装率が、多くの人々が考えているのとは逆で、タイ・韓国・中国といった国々よりも下だということを、『逆説の日本史』本編の第17巻で詳しく述べた。「上」ではない。「下」なのである。

なぜ、そうなのかといえば、日本は近代以前、「馬車」というものをまったくといっていいほど使わなかった、極めて不思議な国だからである。

馬はいる。荷車などを造る技術もある。ならば、その馬と車を連結すればすぐに馬車ができる。そして馬車を、どんな気象条件でも円滑に運用できるようにするためには、道路がぬかるみ滑らないようコーティングすること、つまり舗装が絶対に必要になる。

タイも韓国も中国も、あたり前のように馬車を使っていた。日本では、近代以前は、**天皇も将軍も馬車に乗らない**。舗装の技術の問題でもない。昔の舗装は石畳であり、京都の寺院の石畳を見れば、道路を舗装することなど、その気になればいつでも可能だったし、東海道を石畳化することだって不可能ではなかったはずだ。しかし、やらなかった。

日本人が馬車を使わなかった理由はいくつか考えられるが、その一つに、戦国時代があまりに効率化・スピード化を求める時代であったが故に、その反動で次の江戸時代は、「無理をしない」社会になったと一応は考えられる。逆にいえば、戦国時代がもう少し長く続いていれば、東海道石畳化を織田信長がやったかもしれない。

「武田騎馬軍団」という言い方自体は、不正確な誇張以外の何物でもない。

まず軍団といえば一般的には、近代兵制による兵士の集合単位を指す。

一番小さいのが**分隊で10名前後**、分隊が2個から4個集まると**小隊**になり、小隊が5個前後（数字は一定しない）集まると**中隊**、中隊が5個前後集まると**連隊**、連隊が2個から4個集まると**師団**になる。そして、その師団が2個から4個集まると**軍団**（corps）になる。ということは、数では数万から10万近くになる。

武田軍は最盛期でも3万人ぐらいが上限の人数だから、軍団の要件を満たしているといえないこともないのだが、問題は「騎馬軍団」というところだ。「騎馬軍団」といえば、騎馬隊つまり騎兵（馬に乗った兵士）が中核の部隊であると見えてしまうことだ。

実は、武田軍の中核は騎兵隊（騎馬隊）ではないのだ。

例えばイタリアで、「歴史の道」というテーマで50本の道が選ばれたとしよう。すると、間違いなくその50本は**全部舗装道路**のはずだ。「えつ、近代以前の道も？」というのは実は愚問中の愚問で、西ヨーロッパで道路といたら、それは舗装道路であるというのが常識で、しかもその常識は、日本という国が誕生する以前の、紀元前にすでに出来上がっていたものなのである。

筆者は、そもそも法学部出身で昔は記者をやっていた人間だ。つまり、日本史の専門教育は一切受けたことがない。にもかかわらず、**なぜ日本史を書いているか**といえ**ば、プロの歴史学者の視野があまりにも狭く、日本史の一大特徴に気がつかない体質がある**、ということに気づいたからなのである。

では、ここで、今読者の皆さんの頭に浮かんだに違いない、大きな疑問に答えよう。それは「**なぜ海の向こうは紀元前から舗装率100%なのに、日本はそうではなかったのか？**」という疑問だ。それはひと言でいうなら「**馬車を使わなかった**」からなのである。

歴史上、「奇跡の大逆転」を遂げた人物は、少数だけれども必ずいるものだ。

日本史でいえば源頼朝がその代表だが、実は後醍醐天皇もそうなのだ。

後醍醐天皇は鎌倉幕府（というより、北条執権体制といった方が正確だが）を倒そうとしていた。

倒幕である。

しかし、道は困難であった。

理由は簡単で、幕府は曲がりなりにも軍事政権なのに、**天皇は武力というものを保持していなかった**からだ。

ここが日本史の最大の特徴で、他の国の歴史との違いを知る最大のキーポイントともいえる。

通常、どんな国でも、どんな王家でも、近代以前は武力あるいは兵権（へいけん）といったものを絶対に手放したりしない。なぜなら、権力を維持するためには、反対勢力を潰し、コントロールするための武力が不可欠だからだ。

ところが、ここが日本だけ、つまり日本史だけの特徴なのだが、日本には「ケガレ」いや「ケガレ忌避（排除）」という信仰がある。日本古来の伝統思想「神道」に基づくもので、要するに「死」と「血」はケガレを生み出し、そのケガレがあらゆる不幸の根源になるのだから、**基本的に排除しなければならない**、という宗教的信念である。

「なぜ、そうなったのか？」という問いには実は答えられない。宗教には理屈がないからだ。ただし、こういう信仰自体が存在したことは、まぎれもない事実である。だから、本当は、日本史というものはこの「宗教」を手掛かりに分析しなければならない。

頼朝・家康と尊氏は3人とも「幕府の初代征夷大將軍」だが、その資質には決定的な違いがある。既に述べた「**非情の決断力**」である。

政権運営にとって障害になるならば、弟だろうが息子だろうが、死に追いやっても構わない、ということだ。家康は当時逆らえなかった織田信長の命令で正妻と長男をいっぺんに殺したこともある。ところが、尊氏は極めつきの愛妻家であった。欲もなくて、自分の持ち物をどんどん部下に与えてしまう人物であった。

頼朝・家康が「非情でケチ」だったのとは正反対だが、問題はこういう「友愛の人」がトップに立つと国はかえって乱れるということだ。理由は簡単で、国の平和にとって滅ぼしておくべき人物や組織を、頼朝・家康ならただちに潰せるが、「友愛の人」尊氏にはそれができないからである。

温情といえは聞こえはいいが、要するに優柔不断ということだ。決断が遅れに遅れるのも、「**すべての人々が納得する結論を探そう**」という、**最初から不可能なことに拘るから**だ。そして、それに拘っているうちに大切な時間を失い、「手遅れで病人を死なせる」というような結果を招いてしまう。

刑法を学んだ人間なら、誰でも知っている「カルネアデスの舟板」という故事がある。これはカルネアデスというギリシアの哲学者の出した有名な難問である。

船が難破し二人の男が一枚の板にすがりついた。しかし、二人が共に掴まれば板は支え切れない。その場合は、一人が助かるためにもう一人をはたき落として（つまり殺して）も無罪とすべきだという問題である。

それは「幸」という字は、織田家における「信」や徳川家における「家」のように、家督を継いだ長男に与えられるケースが多い「通字(とおりのじ)」というものだからである。従って、この「幸」の字を捨てるということは、真田家の伝統と決別するという意味を持っている。

驚嘆すべきことは、世界各地でアジア人を恫喝しまくり領土を奪い続けたイギリス人が、高杉の気迫に遂に彦島租借を断念したことだ。

まじめな桂なら、こうはいかなかったろう。まじめ人間は「**戦争に負けたのは事実だから仕方がない。多少は相手の言い分も聞かねばなるまい。それが交渉というものだ**」と考えてしまうからだ。

ただ、桂はそれだけ理性的で最も客観的な判断ができる男だとはいえる。だから、坂本龍馬が薩長同盟を持ちかけたのも、高杉ではなく桂だった。

「バルカン政治家」とは、今日は〇〇、明日は××のように巧みに「馬」を乗り換えながらも生き残っていく政治家（勢力）のことで、大勢力ではない小さな勢力である。大勢力のどことどのようにつながるかが、生死の別れ道になる。

ピサロに滅ぼされたインカ帝国、コルテスによって滅ぼされたアステカ王国がその代表例で、これらの国々は今はペルーやメキシコになっているが、住民はスペイン語を話し、名前も「ロドリゲス」や「ドミンゴ」のようなスペイン名にさせられている。

何よりも恐ろしいのは彼らが、ピサロがインカ帝国を滅ぼす時に取った手段、つまり王を人質に取り身代金を出させたうえに無実の罪で処刑するなどという、極めて卑劣な方法で征服事業を進めたのもかかわらず、一片の良心の呵責もなかったことだ。

これは誇張していつているのではない。**彼らはそれを正義だと固く信じていたのだ。**

だから、逆らう原住民を何人虐殺しようと、原住民の女性を何人レイプしようと、彼らはいささかも自分の行動に疑いを持たない。なぜなら彼らは「**本当の神を知らない**」という「**罪**」を犯している人々を、伝道して正しい方向に導いていると確信しているからだ。

危うさというのは、欧米列強が蒸気機関の発明によって得た強大な軍事力で、アジアを支配下に置こうとしていたことを、幕府がまったく無視していたことだ。

幕府は三百年近く続いた**平和が、このまま続くもの**だと考えていた。鎖国さえしていれば、その状態が永遠に続くと考えていた。つまり、鎖国が可能だと思っていた。それが不可能だったことを、我々現代人は知っている。そして、これは当時の人間でも、世界情勢に詳しい人間なら認識できることであった。

当然、シーボルトは気がついていて、そして、その予想を現実化する大事件が起こった。アヘン戦争（1840（天保11）～1842（天保13）年）である。

世界を植民地化するという野望を待ったイギリスが、清（中国）に仕掛けた理不尽極まりない戦争だ。イギリスの国会議員ですら「最も恥知らずな戦争」（ウィリアム・グラッドストーン）と評した戦いに、イギリスは勝った。「悪」が勝利を収めたのである。「次は日本の番だ」——それはシーボルトでなくても誰しもが予想がつくことであった。

信長・秀吉の海外拡張路線は、それは一種の「帝国主義」であったが、秀吉の失敗でその路線を放棄した日本は、「平和」を第一とし、「科学技術」を基本的に封印した。将軍ですら馬車を使わず、「せまい甘本そんなに急いでどこへ行く」が正しいと考えられた社会だった。だから日本の道は近代以前、ほとんど舗装されていなかった。

また、「戦争の放棄」ということは「競争の否定」でもある。だからこそ、治安も安定した。犯罪というのは「もっと上に行きたい」「もっとラクをしたい」という社

会で起こるものだからだ。それ故、日本は外部の競争社会とは一切交流を絶った。

例えば、幕府は幕末に欧米から新しい武器（神式銃や大砲）を買い込んだ薩長に敗れた。幕府の武器は旧式のものだからだが、よく考えてみればこの論はおかしい。というのは、江戸三百年、ヨーロッパとの交流ルート（オランダ）を持っていたのは幕府だけだ。密貿易を行なっていた薩摩藩ですら、そのルートは清（中国）に限定されていた。

ならば、幕府は常にオランダを通じて武器をリニューアルすることを、やろうと思えばできた。しかし、しなかった。幕府が間抜けというよりも、それが日本の国是だったのだ。

日本人が外国人を嫌い、「撲夷、撲夷」と叫んで追い出そうとしたのも、そして庶民がそれを正しいと思ったのも、根本的にはこの感情がある。

富樫左衛門という固有名詞のようではない。左衛門というのは通称で、本当はその下に諱（いみな）すなわち実名が入るはずだ。例えば西郷吉之助隆盛のようにである。

さいごうきちのすけたかもり

キリスト教は自殺を大

罪として禁止していることだ。これは神に頂いた命（アダムとイダ神曹参照）を、勝手に、しかも神の救いを信ぜずに「破壊する」ことが、神への冒瀆ととられたからだろう。

確かに、俳句には単なる言葉遊びに墮落しかねない危うさがある。

「——根岸の里の侘び住まい」という悪戯(いたずら)をご存じだろうか。これに上の句さえつければすぐ俳句になるというのだ。

春雨や 根岸の里の 侘び住まい

夏の雲 根岸の里の 侘び住まい

秋風の 根岸の里の 侘び住まい

もうやめよう。確かにこれなら何万句でも作れそうである。

西鶴にとって俳句とはそういうもの

でしかなかった。西鶴はもともと芭蕉と同じく俳語師としてスタートしたが、この頃俳句は芸術として行き詰まっていた。作品は月並になって魅力は半減し、多くの人々は「俳譜（という芸術）には未来がない」と思っていた。西鶴が大矢数(おおやかず)に挑戦したのも、これで別の道に行くための踏ん切りをつけるためだった、と私は解釈している。

現に西鶴は、この後びたりと俳句を止めて、『好色一代男』きの「小説」に専念するようになる。

